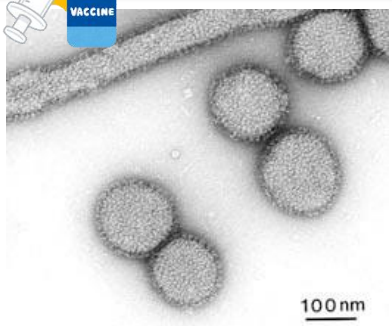
ICTニュース

大阪府済生会中津病院　感染対策チーム

2022年11月号
Vol.95
（2022年11月5日発行）

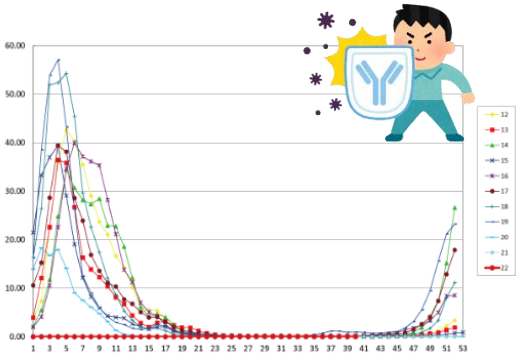
インフルエンザワクチン



国立感染症研究所HPより

インフルエンザウイルスは遺伝子が変化しやすいので、一度感染して免疫ができていても新たに変異した遺伝子をもつウイルスでは免疫は効きません。そのため、WHO（世界保健機関）は毎年、流行する可能性のあるインフルエンザ株を発表し、それを元に国内の専門家がその年の流行を予測してワクチンの基となるウイルス株を決定し、ワクチンを製造しています。インフルエンザウイルスは、抗原性の違いから、大きくA型、B型、C型に分類され、流行の原因となるのがA型とB型です。A型には亜型と呼ばれる種類があり、A/H1N1（Aソ連型）やA/H3N2（A香港型）というように、HとNと数字で表しています。この2つのA亜型とB型の3種類は、毎年世界中で流行を繰り返していましたが、2020年と2021年には流行が見られませんでした。しかし、2022年に流行するかどうかは不透明な状況です。流行が見られないまま、抗体の低下が危惧されていますので、インフルエンザワクチンの重要性が高くなっています。

現在、日本で使われているインフルエンザのワクチンは、不活化ワクチンで、2015年以降は、A型が2種類、B型が2種類と、合計4種類のインフルエンザウイルスに対応するワクチンになっております。海外では鼻に投与する経鼻インフルエンザ生ワクチンがありますが、日本ではまだ承認されていません。インフルエンザワクチンの効果に関する研究では、65歳以上の健常な高齢者について約45％の発病を防ぎ、さらに約80％の死亡を阻止する効果があったとされています。乳幼児に対するインフエルエンザワクチンの有効性に関する研究でも、報告によって多少幅がありますが、概ね20～50％の発病防止効果があったと報告されています。日本と米国による共同研究では、学童集団接種が実施されていた 1970 年から1980 年代のインフルエンザによる死亡者数（超過死亡）は、1990 年代に比べて大幅に低く，1994 年の集団接種の中止以降，インフルエンザの死亡者が急増していると報告されています。以上より、インフルエンザワクチン接種が個人にも社会にも重要であると思われます。（小児科部長　清益 功浩）

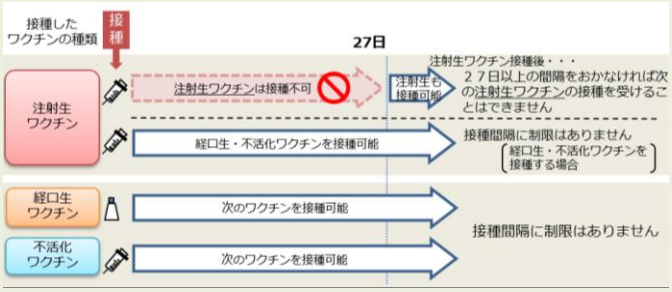


インフルエンザ過去10年との比較（国立感染症研究所 https://www.niid.go.jp/niid/ja/flu-m/813-idsc/map/130-flu-10year.html）

豆知識

令和2年10月1日より規定変更
異なる種類のワクチンを接種する際の接種間隔のルール

生ワクチン接種後に生ワクチンを接種する場合のみ、27日以上の間隔をおかなければいけません。
ただし、現時点で、新型コロナウイルスワクチンは、他のワクチンとは2週間以上の間隔が必要です。
※同じ種類のワクチンの接種を複数回受ける場合、ワクチンごとに決められた間隔を守る必要があります。



プリオン対策

プリオンとは、伝達性（感染性）を持つ異常プリオン蛋白質で、プリオンにより引き起こされる疾患をプリオン病といいます。代表的な疾患にクロイツフェルト・ヤコブ病があります。プリオンは、通常のウイルスや細菌などの微生物に用いられる一般的な滅菌 ・ 消毒法で不活性化させる事ができないという特徴があります。サプライセンターでは「プリオン病感染予防ガイドライン2020」で定められたハイリスク手技を手術室で行う事の有る眼科、脳外科、整形外科、形成外科などを対象に、**「a：アルカリ洗浄剤を使用できる耐熱性器具、b：アルカリ洗浄剤を使用できない耐熱性器具、c：非耐熱性器具（オートクレーブが困難な器具）」**の3種類に分類し処理を行っています。プリオン対策は、通常処理の器材群と比較し、余分に手間と時間を要しますが、サプライセンターは感染制御チームの一員として、安心、安全な器材を現場に提供するため、ガイドラインをできる限り遵守しながら業務を遂行しています。また、プリオン病（疑い）患者の診療も考慮し、感染管理室と共同で文書を作成し、連携しながら、その対応に取り組んでいます。プリオン病（疑い）患者が発生した時は、必ず感染管理室へ一報を入れて頂き、サプライセンターで使用する器材などの調整をしていきます。今後の課題として、プリオン病感染予防ガイドラインでは、耳鼻科領域「臭神経周囲の粘膜に及ぶ手術」の対応も記述された為、対策の検討が必要です。（サプライ部室長　平松治）

プリオン専用タッパー

専用タッパーで回収した器材は、サプライセンターで廃棄可能か検討し、適切に処理する